孤独の賭け　第二部

五味川純

孤独の賭け　第二部　　定価　250円

1963年1月20日　第1版発行
1963年2月10日　第4刷発行

著　者　© 五味川純平
1963年
発行者　竹村一
印刷所　暁印刷株式会社
製本所　永井製本所

株式会社　三一書房
東京都千代田区神田駿河台2の9
電話東京(201)9581～5番
振替東京84160番

落丁・乱丁本はおとりかえいたします　　三一新書 367

孤独の賭け

第二部

五味川純平著

三一書房

1

道路がひどく混んでいて、車は走れなかった。ところによっては、のろのろと働っては、すぐ停る。その繰り返しである。こんなときには、歩いた方が確かに早い。こうした混雑に出くわすと、高価な車であればあるほど、無用の長物となる。この大都会は、循環系統に致命的な故障のある病人に似ている。

千種梯二郎は、いまは、しかし、あまり急がない。乾百子のような女は、少しぐらいは待たせた方がいいかもしれない。

待っている間じゅういらいらしている百子の顔や動作が、見えるようであった。そのうちに、待たされることに腹を立て、そうまでして頼らなければならない自分自身になおさら腹を立てて、無理にも自分を落ちつかせるにちがいない。

そのとおりであった。

百子は、社長室の隣りの、応接室というよりは、待合室と呼ぶ方がよさそうな部屋で、据え物のように椅子に坐っていた。狭いところを神経質な動物のように何十ぺんも歩きまわった末である。

一心に考えつめているようであったが、彼女の足同様に、考えが同じところをまわっているにすぎなかった。いくら考えても、いい知恵が浮ばない。それも、かねと力がないからである。だからこそ、千種を頼って来たのだが、直ぐ帰ると言った男がなかなか帰って来ない。

はじめは、時間の進みがひどくのろかった。そのくせ、いつの間にか、途方もない時間がたってしまったよ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

うな感じに変った。しまいには、もう、時間などどうでもよくなった。中川京子が、気の毒がってか、肚を探ぐるためにか、紅茶を持って来てくれたりしたが、百子は、

「あたしにかまわずに、仕事をしてちょうだい」

と、邪慳に追い払った。

京子をつかまえて喋り合っている方が、時間のたつのも早いし、千種をめぐる最近の事情もわかるかもしれないのだ。いつもの百子ならそうしたはずである。

百子は自分で自分の心を追いつめていた。それは自分にもわかっていた。目的が小さな復讐にすぎぬことも、よくわかっていた。蒔田二郎が批判するにちがいないことも、二郎にかぎらず、だれでも百子の意図を肯定はしないだろうことも、よくわかっていた。千種梯二郎さえも死屍に鞭うつようなことはやめるべきだ、と、平凡なことしか言ってくれないのだ。それでも、その男に頼ろうとしている自分が、今度は、いじらしくなってきた。

戸があいて、中川京子が、ていねいに、よそよそしく言った。

から一時間と少したっている。

梯二郎は帰ってきたばかりのところらしく、書類に眼を走らせていた。

「そっちの方がいでいい」

と、ソファーをすすめたが、ろくに百子を見ようとはしなかった。

これが、ものの一分とはたたない時間だが、百子の顔を硬ばらせるに充分であった。

千種が書類を放り出した。
「それで？　僕に力を貸せというのは、どういうこと？」
男の話は、たいてい、いきなり結論から出発する。女は、それで、たいてい、まごつく。百子のように男のような性格の女でも、そうらしい。
一呼吸あって、出たことばは答えではなかった。
「……話が遠いわ」
「聞えるよ。君の顔も充分拝める。言いたまえ」
「さっき電話でお話したけど、叔父が病気なの……」
「病気で死んでもらっては困るとは、はじめて聞いたセリフだね。病気はなに？」
「肝硬変とかって……」
「ずっと入院してるんだね？」
「ええ。でも、おかねがつづかないから、家へ帰るらしいわ」
「……それで？」
「死ぬ前に、家と土地を取り上げてやりたいの。どうしても！」
「それも聞いた。しかし、どうやってだね？」
百子は、この女にしては全く珍しい、眼を伏せて自分の膝のあたりを見ていた。
千種が重ねてきいた。
「〝ボヌール〟のようなことが、二度あるわけではないだろう？」

「……もう人手に渡っているんです」
「売ったのかね？」
「いいえ」
「それじゃア、借金のカタに取られたってわけだな」
百子がこっくりをした。
「どうしようもないだろう、そこまでいっているものを」
投げ出すようにそう言う千種を、百子は、握りしめた拳を口にあてがって、見つめていた。そうすることで、声が飛び出てくるのに蓋をしたように見えた。
普通なら、これで話は終ったのだ。もう一言の必要もない。これ以上は、気休めにすぎないか、要らざるおせっかいになるか、忠告めかした説教になるかするだろう。千種は、説教も、おせっかいも、気休めも言う気はなかった。それでも机から立って行って、百子の前に腰を据えたのは、力の意識が自信を生み出すときにたいてい併発する意識上の疾患のせいである、自信過剰ともいえるし、人間が甘くできているともいえる。既に終っているものを、なんとかしてみせてやりたい、そういう謂わば遊びなのである。人間が甘いか辛いかは、必ずしも苦労の程度にはよらないらしい。
「……叔母さんたちはまだそこに住んでいるのかね？」
千種のその問いから、百子は男の甘さを見抜いたわけではないが、眸がひときわ熱っぽくなった。
「来年の四月まで住んでいてもいいことになっているんですって」
「叔父さんはそれまでもちそうもないのかね？」

「そうらしいわ……」
「それじゃ、もう倒れたも同じだろう。倒れたものを、どうやってまた倒すのかね？」
「……買い戻したいんです。買い戻して、あたしが、自分で、立ち退かせたいんです。叔父が死ぬ前に、叔父たちのしたことの報いがこれなんだと言ってやりたいんです。路頭に迷う妻子に心を残して死ぬがいいと言ってやりたいわ」
「あんたの怨みを買ったら、助からんな」
千種は笑った。百子はにこりともしなかった。
「その家や土地が、どうしてもほしいかね？」
「いいえ」
あっさりと言いきった。
「ちっともほしいなんて思いません。叔父が死んで、叔母を追い出したら、その翌日に手放したってかまいません」
「無駄な遊びだな」
千種は渋い顔をした。
「……いくらだって、そこは？」
「いま持ってる人は、四百万で売りたがっているんですって。でも、国道沿いじゃないし、いまは人が住んでいるから、なかなか買手がつかないらしいの」
「土地は何坪？」

「確か、百五十坪だったわ……」
「田舎の町にしちゃ高いな」
「でも、しっかりした家が二十八坪だったか、あるわ」
「売買のときには、上物は薪と同じだ」
千種は仰向きかげんになって、宙で算盤をはじいた。
「……仮りにだよ、買うかねがここにあるとする」
百子は、瞬きを忘れた。
「あんたは、どうやるかね？」
「値切るわ」
「いくらに？」
「三百万でどうかしら」
「仮りに値切れたとしよう。三百万で買って、言いたいことを言うために、四月まで寝かせておくかね」
「……しゃるの？」
「……万のかねをかねでないように言うあんたの神経の図太さには、敬服するがね、いままでにいちばん多かったあんたの月収額で割ってごらん。飲まず食わず、一文も費わずに、何十ヵ月かかるか」
「……わかったわ」
百子は近視眼者のように眼をほそめて、千種のそばのどこか一点を見つめた。それは遠い過去の一点へ視線を送っているようにもあった。

「……買うときに、立ち退きの期限を短縮させるように交渉するわ」
「そんな芸当ができるかな？」
「できると思うわ。換金したがってるらしいから……」
「まあ、とにかく、一度帰って、見て来るんだね」
「お願いできて？」
百子の声が跳びついて来た。
「聞いてくださる？」
「よし来たと直ぐには答えられんよ。だから、とにかく見て来なさい。登記簿謄本と地所の青写真と附近の見取図と、それから、できたらその近辺を写真にとって、持って帰るなり、送って来るなりするんだね」
「わかりました。そうします」
声が明るかった。千種は笑った。
「現金な人だな。いや、そうじゃないな。一文にもならんことに大金を動かすやつは、ばかのたぐいだ。あんたとつき合ってると、こっちのペースまで狂ってくるよ」
百子がようやく笑った。笑いながら、眸の光りに湿りがきたようであった。
「あたしは怨みを忘れないだけじゃないわ。恩も忘れやしません」
「恩になるか、あだになるか、僕は知らんよ」
千種は笑顔を消した。
「ほんとうはだね、そんな役にも立たんことにかねを寝かせるより、それに足しまえをして、あんたにやっ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

てみてもらいたいことがあるんだ」
「なんなの？」
「いまは小汚い小さなバーだがね」
千種の暗い視線が、百子のはずんでいる胸の隆起へ注がれていた。彼は、そこに、百子の堅く引き締って屹り立っている乳房とは別の、もっと弛緩した、もっと熟した、白い脂肪の丘を重複させていたのである。
倉沢時枝は雇われマダムにしてくれと云うだろう。百子を置くとしたら、あのマダムの据え場所を考えてやらねばなるまい。もしサムエル・ミヤタに利用価値があるとしたら、倉沢時枝も持駒として役に立たぬでもないからである。
「……あたし、そんなこと、考えたこともないわ」
と、百子が疑わしそうに梯二郎を見た。
「考えてもらいたいな。きっといい商売になる」
「ええ。でも……」
顔が、幾度も小さく揺れた。いまはそれどころではないというのだ。
「さっきのお話と、これと、見合いにしてらっしゃるの？」
「そうじゃない」
千種は立った。
「しかしね、かねをただ遊ばせるのは、勿体ないというより、そんなばかばかしいことは、商売人としては我慢がならないことなんだよ。わからないかもしれないがね、かねで身を立てようというあんたなら、そのく

らいのことはわかってもらわなくては困る。それでだ、もしあんたがどうしても田舎の土地と家をいっときでも買い戻して意趣晴らしをしたいというんなら……」

「わかったわ」

百子がさえぎった。坐ったまま千種を見上げて、いかにも心得たように笑った。

「ボヌールを半月待って押えたら、それを売るか、担保にしておかねをつくるとおっしゃるんでしょ？」

「……よくわかるね」

千種は背を跼めて、顔を近づけた。

「君が男だとよかった。いい相棒になれただろう」

「女でもなれるわ。もっと訓練されなくちゃ駄目だけど」

「駄目だよ。君がおかめなら別だが」

千種には、場所柄もわきまえずに、そのまま百子に圧しかぶさりたい衝動が起こった。扉の向う側に中川京子がいなければ、そうしたかもしれない。いても、未来がどうなってもよければ、そのぐらいのことはしただろう。

千種は背を伸した。大胆不敵を自負している男が、実は、未来を怖れ、世間体を気にしているただの男にすぎないのだ。にがい汁が口のなかにひろがる思いであった。

「承知かね？」

気のせいか、自分の声が濁って聞えた。

「ええ」

百子の答えは澄んでいる。
「承知するもしないもないわ。もともとあなたのおかねですもの」
「あんたに無断で売りはしないがね、遊ばしてはおかない。無論、その土地をあんたがまた換金して返してくれるとか、あるいは、僕がそこをそのまま持っていようという気になったら、ボヌールの方は直ぐに抜くよ。せっかくのあんたの利益を侵害したりはしない」
「そんなこと、おっしゃらなくても……」
あとは、百子がときどき見せる独得の笑顔になった。眸の光りようは鋭くて、唇はやわらかくほころびている。
「……さあ、話はすんだ……」
千種が云った。
「僕に仕事をさせるかね、それとも別のことをさせたいかね？」
「そうだわ、ここは会社だったわ」
百子も立ち上った。話が終ってみると、いらいらしながら待っていたにしては、あっけなくて、何か云い忘れているような気がしたし、それとは別に、肌が思い出したがっているなま温い誘惑の手を、振り切るのも惜しまれた。
「……帰りたくはないけど、取引したみたいになるでしょう？　帰ります」
ドアの前でふり返って、もう一度にっこりした。
「あなたがお閑だったら、ほんとは、いっしょに行って、土地を見ていただきたかったの。値打ちがあれば、

まんざらばかな遊びってことには、ならないでしょ？　でも、駄目ね……」
「図面を見ればわかるよ。いつ行くかね？」
「……今夜か、明日」
「滞在費なんかの用意はあるんだろうね？　行ったとたんに助けてくれれば、乾百子女史の沽券にかかわるよ」
「一ヵ月ぐらいの用意はあるわ」
「片がつくまで帰らないつもりかね？」
「たぶんね」
百子は口よりも眼の方が雄弁であった。千種が話に乗ってくれるものと信じこんでいるらしかった。そう信じさせてくれと、懸命に願っているのかもしれなかった。
「……買い戻しのおかねを送っていただけたら、ボヌールのことは、白紙委任状を速達で送ります」
「まあ気のすむようにやってみるんだね」
千種は、自分の甘さを意識しないわけにはいかなかったので、つけ加えた。
「ただし、あんまり算盤を無視しないでほしいな」

2

数日後に、梯二郎の手もとに速達便が届いた。百子からである。梯二郎が指示したものの他に、その街の土

地の査定価格表まで入っていた。役所で調べて写したものらしい。役所の査定価格は時価よりずっと低いものだが、それなりに比較してみれば、百子が買い戻したがっている土地の価格は決して高くないということを、千種に証明したいのだろう。

千種は微苦笑を洩らした。千種にとっては地価の証明になるというよりも、百子が復讐に憑かれて見さかいもなくなっているのではなくて、算盤に合う話をしているのだと、しきりに力説しているように受けとれるからである。そんなことをしなくても、千種にはわかっている。抵当権を設定するのに評価額いっぱいまで貸す者は、まず、いない。人によってちがうことだが、おそらく五割、せいぜい奮発して七割どまりだろう。それを取って、売りに出している。よほど世間をなめていないかぎり、むやみに高値をつけるはずがないのである。

百子からは、追いかけて第二便が来た。千種は、今度は、思わず、ほう！　と口をあけた。売り手は、十日以内に全額を支払ってもらえれば、三百万円で売り渡すというのである。本人からの念書も添えてある。ただ一つ、立ち退きの期限を切り上げる交渉は成功しなかったらしい。百子はこう書いていた。

〃……現在の所有者は西山さんという人ですが、ほんとうはもっと早く立ち退かせるようにもできたのだそうです。それを、かわいそうで四月まで認めてやったからには、いまさら期限を繰り上げるには、十万とか二十万とか出してやらなければならないというのです。私は三百万まで値切りましたから、十万かそこらのことは大したことではないと思いますけれど（ごめんなさい、あなたのおかねなのに、勝手なことを云って）、でも、この際、私はたとい一万でもあの人たちの手に入れさせたくはありません。私はまだ叔父にも叔母にも会っていないのです。きまりがついてから会うつもりです。一度だけ。血を分けた弟に欺かれた父と、まるで乞食扱いにされた母とに代って、ただ一度だけ。それを最後にしたいと思います。その日かぎりで、過去を切り

捨ててしまいたいと思います。

千種さん、あなたが、立ち退きまでの期間を短縮できなければ駄目だとおっしゃれば、私は諦めます。おかねをやってまで短縮するようでは、意味がないのですもの。あの人たちは、病気で苦しんだり、貧乏にさいなまれたりするがいいのです。他人の不幸を願うほど下劣なことはないと、教えられもしましたし、読みもしました。けれど、それがなんでしょう！　目には目をですわ。下劣というなら、あの下劣な人たちが顔をそむけるほど下劣になってやりたいとさえ思います。あの人たちは、住むところもなくなり、どこへ行っても厄介者扱いにされるがいいんです。私は笑ってやります。母が、子供だった私には見せまいとして、ひとりで声をしのんで泣いていた分だけ、大声で笑ってやりたいと思います。あの人たちは、だれからも物乞いに来たのではないかとうとまれるがいいんですわ。私はそのたびに喝采してやります。あの人たちは、母が、あの人たちから、五センチも十センチも芽が伸びたジャガ芋を屈辱を忍んで、何度もお礼を云わされて受け取ったように、他人から餌を投げ与えられるがいいんです。私は云ってやります。よかったじゃないの。それだって元はたべ物だったのよ。だからいまだってたべられるわ。今夜も飢えずにすんでよかったじゃないのって。あの人たちは、電気のもとを切られて、血の出るような思いで蠟燭を買って来て、それで子供に勉強をさせ、眼をしょぼしょぼさせながら内職するがいいのです。そして、蠟が溶けるようにいのちを縮めたら、私はきっと乾杯するでしょう。あの人たちは、ささくれ立った畳の上で、綿のはみ出た煎餅蒲団に横たわって、ろくに薬も飲めずに死ねばいいのですわ。だって、叔父が入院できたのなんか、全くあの土地と家があったからこそなんですから。それももう終りに近づいています。私は、その日が来たら、叔母を叔父の枕もとに引き据えて、云ってやろうと思っています。この土地と家は、今日から私のものになって、あんたたちは書類に書かれている期日ま

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com